

文京通信

ふみのみやこ

東京文京学習センター

開所時間 : 10:00~12:00

13:00~17:30

(視聴学習室 : 10:00~17:00)



2026/02/07
永原先生 公開講演会



2026/04/05
入学者の集い

主な内容

2 | 客員教員からのご挨拶

2 | 退任のご挨拶

4 | 着任のご挨拶

6 | コラム「読書について」

8 | 同窓会からのご挨拶

9 | 行事報告・案内



退任される先生方からのご挨拶



熊野 純彦

(前 東京文京学習センター 所長)

熊野でございます。この三月をもって、東京文京学習センター所長を退任する運びとなりました。在任中は各方面、また職員各位にたいへんお世話になり、こころより御礼申し上げます。

三年まえに茗荷谷の駅を降りたときには、不安なことばかりでしたが、なによりも最初の不安は、センターへの道が分かるだろうか、ということでした。おそらく脳機能のなにかに否みがたく欠陥があるのでしょうか、救いようのない方向音痴ですので、簡単な地図を見ても不安が拭いきれない。むかし石神井公園駅から徒歩3分というマンションに住んでいたとき、しかも昼日中、道に迷ったことがあります。ところが駅に着いてみると、センターはほんとうに拍子抜けするほどに「目と鼻の先」でした。これが最初の「僥倖」でした。

もっと不安だったのは、あらたな職場で、あたらしい同僚の方々といっしょに仕事を進めてゆくことそのものでした。ながく一つところに居りましたので、外の世界を知りません。前任校では学生たちが比較的「等質的」でしたが、今度の職場はいろいろな意味で「多様性」に満ちていそうです。30年以上大学教師をしておりましたので、それなりの経験は積んできたつもりではありましたが、それでもなお、正直かなりの不安を抱えていたものでした。

ありがちな表現を使ってしまうと、とはいえ、実際には「案ずるより」であったことを、文字通りの「僥倖」と感じておりますが、得がたいこの幸運は事務室の一人お一人、またカウンセラーの近先生から与えられ、また支えられてきたものだと思っております。

時おり恵まれた、学生さんたちとの面談の機会は、どれも基本的には楽しいものでした。歳を重ねてこられた学生さんの勉学意欲に圧倒されたこともありましたが、特異な背景をもつ学生さんのお話に聞き入ったことも一度や二度ではありません。卒業研究の相談を受けて、その視点の斬新さに密かに一驚したこともあります。残り時間を数える年齢ともなって、そうした機会が与えられたことも、ひとつの「僥倖」と考えています。

放送大学の理念、開かれた大学という理念は、本来すべての大学が、歴史的に課せられ、現在的にも要求されている理念そのものであると思います。アリストテレスの講義録の冒頭にもあるとおり、「すべての人間は生まれつき知ることを欲する」からです。放送大学が建学以来かかげてきた理念は、その意味では「崇高」といっても過言ではないものです。

とはいえ他方では、放送大学そのものや学習センターのあり方には、おそらくはいくつもの課題があり、今後とり組む必要のある問題も少なくはないことは、この三年のあいだにもいくらか認識を深めてまいりました。放送大学と各学習センターが、そしてなにより東京文京学習センターが、その崇高な理念を裏切ることなく、それぞれの課題に挑戦し、問題をひとつずつ解いてゆくことを、遠くから祈念し、また固く信じております。

「退任のご挨拶」



永原 恵三

(前 東京文京学習センター 客員教員)



2026年3月をもちまして東京文京学習センター客員教授を退任いたしました。私は2015年から2020年3月までと、2021年4月から5年間本学習センターの客員教授を務めました。代々の所長はじめ教職員の皆さま、学生の皆さま、東京学友同窓会の皆さまなど、多くの方々との出会いに恵まれ、お世話になりましたこと、心より御礼申し上げます。

私の専門は音楽学と声楽で、学問と同時に音楽の実践にも携わり、本センターでは面接授業と客員教員ゼミで、音楽学の講義と合唱のゼミを開いてまいりました。本センターに着任当初は、2017年3月26日に東京藝術大学奏楽堂で開催された、放送大学南関東学習センターによるベートーヴェン「第九」特別演奏会を目指して、「第九」に関する面接授業を担当しました。「第九」を演奏するにあたって、音楽学の立場から、ベートーヴェンの交響曲全曲のなかでの「第九」の位置づけを考えたり、「第九」自体を第1楽章から第4楽章まで構造から把握したりしました。また実際に合唱の部分唱歌う実践の授業も面接授業として行ないました。大学の授業ですので、アマチュアの合唱サークルの考え方ではなく、専門的知見をお伝えできるように、専門のスタッフをTA（ピアノ、ソプラノ、アルト、テノール、バス）としてお招きして、日本国内で最も充実した「第九」の授業を展開したと自負しております。これが可能になったのは、当時のセンター所長、岡野達雄先生、および足立学習センター所長の柴眞理子先生による大きな支えがあったからです。心より感謝申し上げます。

さて、東京文京学習センターでの活動をふり返ると、ちょうどコロナ禍があって、人びとが直接に集まって顔を付き合わせて話をするという基本的な人間の活動を、一時的に中断せざるを得なくなりました。しかし、5年を経てオンラインと対面をうまく使えるようになったと思います。客員教員ゼミは音楽学をオンラインで開催し、合唱ゼミは対面を中心にしたがらも、オンラインを併用して、それぞれに遠方からでも参加できるようになりました。

放送大学では面接授業やゼミを通じて多くの学生の皆さんと出会いました。そのお一人おひとりが不思議な活力を持っておられると思えました。年齢も興味関心も異なる人たちが、学ぶ意欲を共通の軸として集っておられます。「学ぶ楽しみ」を体現し実行に移されています。そのエネルギーにいつも圧倒されつつ、しかしそれに応えられるような知力と体力をもって授業に臨めたことは私の大きな財産であり、今後の活動への底力になると思えます。

東京文京学習センターは茗荷谷という文教地区で落ち着いた環境のなかにあり、学生の皆さんが集いやすい場所だと思います。今後もますます発展されることを願っております。

着任される先生方からのご挨拶

「着任のご挨拶」



大西 克也

(東京文京学習センター 所長)



4月に熊野純彦先生の後任として東京文京学習センター所長に着任してまだ1週間足らず、右も左もわからない中、このご挨拶を書いています。

私と放送大学との関係は2007年まで遡ります。この年放送大学から、漢字をテーマとした教材を作成して欲しいという依頼を受けました。私の専門は中国の言葉と文字の歴史です。紀元前13世紀頃に甲骨文字として姿を現した漢字は、約2000年後の唐代に、楷書としてほぼ完成の域に達します。豊富な出土文字資料を使ってその歴史を生き生きと伝えたいと考えた私は、二つ返事でこの依頼を引き受けました。大学側との最初の打ち合わせを行ったのが、この東京文京学習センターだったのです。当時は自分がそこに所長として着任するとは夢にも思いませんでした。

放送教材の作成に当たって、中国各地でロケを行いました。2008年初秋、西安・碑林に始まり、湖南省・長沙、湖北省・武漢や荊州を経て最後は北京に飛び、殷代の甲骨から唐代の碑文まで、各地の博物館や大学に所蔵される貴重な漢字資料を映像に収めるとともに、漢字研究の第一線で活躍する研究者にインタビューを行って資料の意義を解説してもらうなど、私にとっても得難い体験をすることができました。



この写真は、武漢・湖北省博物館所蔵の戦国時代（紀元前5世紀）の鐘のレプリカを私が撞いている場面です。放送教材でも紹介しましたが、この鐘は撞位置によって2つの音程を出すことができました。大小様々な鐘を組み合わせ、5オクターブに渉る楽曲の演奏が可能で、当時の音楽の壮麗さが偲べれます。このような取材内容も盛り込んで作成した教材『アジアと漢字文化』（放送大学・宮本徹先生との共編、2009年）は、私の漢字研究の前半の成果を一般の方々に広く知っていただく貴重な機会となりました。

漢字と言葉とは言うまでもなく古代中国の社会と文化の基盤でした。後世に残された漢字に対し、言葉そのものは残りません。こどもの頃から古代中国に憧れた私は、いつしか彼らが言葉を使ってどのように世界を切り分けていたのか、切り分けられた世界はどのように言葉に組み込まれていたのかを知りたくなり、研究を続けてきました。古代の言葉の研究とは、いわば復元作業です。残されたわずかな文献を手掛かりに、失われた古代の言葉に耳を澄ませ、自分に内在する言語感覚や言葉の一般的な性質とすり合わせながら、少しずつピントを合わせていくのです。成功することはあまりありませんが、焦点がはっきりと見えたときの喜びは格別です。

不慣れな所長ですが、客員の先生方や事務職員の方々とともに、よりよい学習環境作りに力を尽くしたいと思います。



小山 玲子

(東京文京学習センター 客員教員)



今年度から客員教員になりました小山です。私の専門分野は「子ども学」で、主に「乳児保育」「保育者の専門性」「保育環境」「親子のふれあい遊び」について研究しています。海外の幼児教育についても興味があります。

幼稚園・保育園・こども園について皆様が持つイメージはどのようなものでしょうか。皆様のイメージは自分が子ども時代に通った園や自分の妹や弟、お子さんが通った園のイメージが原点になっていると思います。いろいろな規模の幼稚園・保育園等があり、保育内容、保育方法は園によって異なります。(まだまだ昭和時代の保育を行っている園があります)どのような保育が行われているか、なかなか外から把握できないため、園を選ぶ時は保育内容・保育方法を知ることが大切です。2010年代から深刻化した待機児童問題は保育園等の数が増えたことにより、多くの自治体でほぼ解消され、現在は「保育の質」が問われています。

日本の少子化は想定以上の速さで加速し、2024年の出生数は686,061人と統計史上初めて70万人を割り込み、高齢者が全人口の約3割を占める「超高齢社会」になっています。この状況は中国、韓国、香港、台湾など、少子化は東アジアの共通の現象であり、それが今後の国際政治にも大きな影響を与えるといわれています。

比較できるデータが揃う2023年で見ると、合計特殊出生率は、日本が1.20であったのに対して、中国が1.00、台湾が0.87、韓国が0.72であり、いずれも日本より低く、東アジア全体で1.01です。この背景には、若者の経済的安定の遅れや、ライフスタイルの多様化、女性の高学歴化と社会進出があり、経済的にも育児と仕事の両立が難しくなっていることなどが挙げられます。各国は様々な対策を強化しており、主な方向性は「経済的支援の拡充、働き方改革とワークライフバランス、保育サービスとインフラの整備、社会全体のジェンダー平等の推進など社会構造の変革」等です。

日本の少子化が今後少しずつ改善されるよう願っています。

今年の3月、台湾の新北市林口区と台北市天母の幼稚園、託児所、公園の遊び場を訪問しました。幼稚園では親子体操・ふれあい遊びの講習会に参加し、現地の保育者や園児・親子と交流を楽しみました。子どもたちの笑顔は万国共通です。台北市天母地区には日本人が多く住んでいて、訪問した好来幼稚園は約半数の園児が日本人でした。保育者の数人は日本語が話せ、保育は台湾語(中国語)と日本語で行っています。

台湾の少子化問題も深刻で「包括的な経済・生活支援(0-6歳国家一起養)、保育・教育インフラの整備」など、現金給付の「量」から子育て環境の「質」へ、さらに社会全体の理解を求める方向へ転換を図っています。

台湾や日本の乳幼児を取り巻く問題・課題を対面授業や自主ゼミ等で皆様と一緒に考えていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

柴田 南雄

『わが音楽 わが人生』

小田部 胤久

(東京文京学習センター 客員教員)



放送大学学歌は、放送大学教授でもあった柴田南雄（1916年生まれ）が作曲しています。本書は作曲家として、また音楽理論家として20世紀後半に活躍した柴田が1995年に、すなわち著者の亡くなる1年前に出版した自伝です。「現代音楽は難しそう」などと敬遠する必要はありません。柴田は西洋の音楽史と、日本における洋楽受容史に重ね合わせる仕方で自身の音楽的経歴について語りますので、読者は柴田の視点から近代日本の人々が西洋音楽とどのように格闘したのかを生き生きと追体験できます。人名索引によれば、何と800名以上の登場人物が、何らかの形で柴田の個人史とのかかわりで登場します。

皆さんにとってやはり面白いのは、柴田の学生時代のエピソードでしょう。柴田は先ず東大理学部で植物学を学んだ後（本人の述懐によれば、高校の時に音楽にのめり込んでいて、あまり勉強をしていなかったために、植物学を選んだとのこと。定員8名に対し志願者8名で、無試験で合格したそうです）、文学部の美学科に学士入學します。「はじめは文学部と理学部のあまりの違いに驚いた。講義には勤勉に出席したが、休講がじつに多いのだった。文学部の先生方は自宅でも仕事ができるせい、登校してみると休講掲示が出ているので仕方なく家に帰ると、母親がなんで先生のお休みがこんなに多いのかと不機嫌になるのだった」といった一節には、今でもそうだなあ、と思わず頷いてしまいます。柴田は後に、東大教養学部で非常勤講師を務めますが、そのときに、講義の申請カードも出しておらず出席もしていない学生から、就職も決まっているので単位を出してほしい、と頼まれたそうです。教務係に連絡すると、「先生さえよろしければ、なんとか単位を与えてくださればありがたいです」との返事があり、柴田は、自身も学生時代に1時間も出席せずに2度単位をもらったことの「罪滅ぼしではないが、まあわたくしの科目なら超法規的な特例を認めてもどうせ人畜無害なのだから、「では合格にしてやって下さい」と教務係に返事をした」のだそうです。皆さんはどう思われますか？ 大学はこうした心のゆとりが許される場であってほしい、と私は考えますが……。

柴田は放送大学の創設にも尽力します。放送授業を受け持つ傍ら、「世田谷の第一学習センターでのスクーリングは、義務ではなかったが、自ら教壇に立つことにした」とありますが、かなりの「重労働」のために体重が激減したそうです。「試験監督の折に、老若の障害を持つ学生さんと個室で対面で向き合うような機会には、障害者と介助者の日常の努力のごく一端に触れ得たことを実感した。放送大学はわたくしにとっても生涯教育の場であった」と回想されています。著者の真摯なお人柄が伝わってきます。

800人もの人生が柴田一人の人生のうちに響いてくるかの如き本書は、1975年作曲の《交響曲・ゆく河の流れは絶えずして》と並んで、私たち（読者／聴衆）を大いなる生へと解き放ってくれる彼の傑作です。

小泉 八雲 『神国日本』

頼住 光子

(東京文京学習センター 客員教員)



NHK朝の連続テレビ小説で取り上げられたこともあって、今、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲、1850~1904)の人生や業績に注目が集まっている。

ハーンは、ギリシャに生まれ、アイルランドで育った。アメリカでジャーナリストとして活動したのち、1890年に来日した。来日後まもなく島根県尋常中学校(松江)に赴任し、武家屋敷の静かな生活や出雲地方の信仰・民俗に魅了され、日本文化への関心を育んだ。その後、熊本で教鞭をとり、妻セツとの間に長男が生まれたことをきっかけとして、1896年には日本に帰化して「小泉八雲」と名乗るようになった。同年から、東京帝国大学で英文学を講じ、日露戦争のさなか、日本の将来を気遣いつつ亡くなり、雑司ヶ谷霊園に葬られた。

近代化の激流の中で失われつつあった日本人の精神文化を、外来の視点と深い共感をもって記録した、日本に関するハーンの世界は十数作にのぼる。いずれも欧米の読者を意識して英語で書かれたものであるが、早くからハーンの子供たちによって日本語訳が行われており、日本でも広く読まれている。

ハーンの世界としては、これまで『怪談』などの再話文学(昔話や伝説などを現代的な感覚や表現で書き直した文学作品)がよく知られてきたが、ここでは、ハーンの世界であり、死後に出版された『神国日本』を取り上げてみたい。

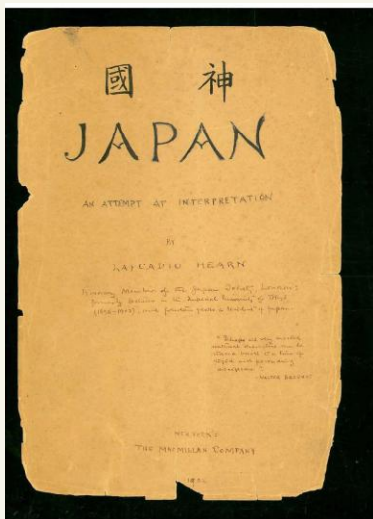
本書の原題は、*Japan: An Attempt at Interpretation*であるが、富山大学のヘルン文庫にのこされた手書き原稿(図 参照)によれば、「神国」という日本語の題名は、ハーン自身が考えたものであることが分かる。ただし、ここで注意しなければならないのは、「神国」という言葉は、軍国主義や国家主義などにつながるものではないということである。「神国」とは、日本人の道徳性や美意識の根本には、祖先神をはじめとする家や村の神々に対する信仰があるということの意味している。

ハーンは日本人の高潔な精神を支えているのは、「おてんとう様」をはじめとする神々から常に見られているという意識であるとする。当時、外国人の日本研究者は、

ともすれば、キリスト教的価値観の立場から、多神教的な日本人の宗教意識は遅れている、日本人は未開だとしがちであったが、ハーンはこのようなオリエンタリズムからは自由に、日本の民間伝承や宗教観、日常の情緒を繊細に描き、西洋には見えにくい日本人の精神世界を言語化している。彼の日本論は、単なる異文化紹介の域を超え、日本人自身が忘れかけていた価値を改めて浮かび上がらせるものであった。

さらに、天皇制保持など、マッカーサーの占領政策に大きな影響を与えた側近フェローズが、本書を通じて日本人の信仰や文化を理解していたことも見逃せない。

日本文化の魅力を世界に伝えるとともに、日本の運命をも大きく左右した本書は、長年、東洋文庫(平凡社)で親しまれたが、今年1月装いも新たに刊行された。一読をおすすめする。



(富山大学附属図書館 所蔵)

同窓会からのご挨拶



「東京学友同窓会の活動」

宇田川 孝男
(東京学友同窓会 会長)

東京学友同窓会は、放送大学の在學生、卒業生及び修了生の方々を対象に、東京文京学習センターと東京渋谷学習センターの同窓会として設立しました。名称は卒業生、修了生のみならず、在學生も対象としていることから“同窓会、ではなく”学友同窓会、と称しています。私も卒業生、修了生であり、今も全科履修生の在學生でもあります。会員の皆様にも同じような方を多く見受けられます。

東京学友同窓会は、2026年3月で設立35周年を迎えました。全国にある同窓会の中でも歴史ある同窓会です。会員数は2026年3月で648名。会員数は年々減少傾向にあり、10年前の2016年には1,450名在籍していましたが、今は10年前の半減以下です。そのため、会の運営は大変厳しくなっていますが、それでも毎年多くの新入会員を迎え、多くの会員の皆様に支えられ、且つ先輩方が残された財産と、少数精鋭の役員体制で頑張り、以前よりも充実した活動を行っています。主な活動としては、研究成果発表会や学園祭の共催、会報の発行、ホームページの開設、会員交流行事、講演会などの開催です。研究成果発表会では企画から運営まで、学園祭ではバザーやポッチャ体験会を行い、会員交流行事では令和7年の秋に「国立西洋美術館観覧とランチ会」を開催しました。ここでは会員の親睦を深めるとともに、様々な情報発信、生涯学習などの学びの向上を目指しています。そしてこの度、悲願でありましたホームページのリニューアルを進め、見やすく、わかりやすく、使いやすく、そして未来型をテーマに構築しました。是非とも新しいホームページをご覧ください。

東京学友同窓会では、放送大学、東京文京学習センター、東京渋谷学習センターとの連携や情報共有を推進し、放送大学の発展に寄与していくとともに、次の世代に向け、新たな一歩を踏み出していこうとしています。近年、放送大学での学ぶ形態が変わってきました。そのため、以前のような同窓会スタイルから変革していく必要があります。今後、学友同窓会が、いつまで、どのように続くのか、近未来の学友同窓会のあり方を考えていきたいと思っています。

最後に、学生ロビーに同窓会掲示板がありますので、ご覧いただくと幸いです。入会もお待ちしております。学びとともにコミュニケーション豊かな楽しい学友同窓会です。

今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



学園祭ポッチャ体験会



▶ 2026年度第1学期 入学者の集い

2026年度第1学期「入学者の集い」を4月5日（日）に開催しました。当日は、152名の学生が参加しました。はじめに学長からのビデオメッセージが紹介された後、所長や客員の先生方、東京学友同窓会会長からお祝いの言葉をいただきました。

新規入学向けに行われたガイダンスでは、放送大学での学習の進め方や学習センターの紹介などが行われました。



入学者数

教養学部 1,719名
大学院 199名 計 1,918名

参加者の感想

基本的には自宅で一人で学習していくと思いますが、この度の集いで、他にも同じように学び始めようとしている人がたくさんいることを認識しました。今後の学習に向けて、モチベーションを上げることができました。ありがとうございました。

▶ 公開講演会

放送大学東京文京学習センターでは、学内外の先生を講師にお招きし、一般の方にも参加いただける公開講演会を開催しています。

日時：2026年1月31日（土）14:00～16:00

参加人数：34名（会場） 372名（オンライン）

講師：鶴見 英成（放送大学准教授）

テーマ：博物館学・別館 ～私たちを取り巻くミュージアムについて改めて考える～



日時：2026年2月7日（土）14:00～16:00

参加者：135名（会場）

講師：永原 恵三（放送大学東京文京学習センター客員教授）

テーマ：西洋バロック音楽の歌曲 — J.S. バッハとG.F.ヘンデルに至る道 —

感想：バロックの音楽の成立過程を永原先生の歌唱とピアノ演奏をまじえわかりやすく解説なされ、感動いたしました。



日時：2026年2月21日（土）14:00～16:00

参加人数：34名（会場） 221名（オンライン）

講師：李 鳴（放送大学教授）

テーマ：法律をもっと身近に

～日常に役立つやさしい法律の基礎知識～



▶ 就職支援セミナー

3月1日（日）に、就職支援セミナー「2040年に自分らしく活躍するためのキャリア設計 ～こだわりを知り、スキルで未来を開拓する～」を開催しました。

鷲見 芳彦先生を講師にお招きし、講義、個人ワーク、グループワークの三部構成でキャリアの「再設計」について理解を深めました。当日は15名の方にご出席いただき、参加者同士が積極的に意見交換する姿が見え、「キャリアを前向きに考えられるようになった」、「学び直しを再検討したい」といったなど、前向きな感想を多くいただきました。



▶ ご案内

東京文京学習センターの学内行事をご案内します。

公開講演会等のイベントのご案内は、詳細が決まり次第、ウェブサイトに順次、掲載しますのでご確認ください。

研究成果発表会

2025年度に卒業研究・修士論文を提出された方々による研究成果発表会を東京学友会主催のもと、8月1日（土）に東京文京学習センターで開催します。

詳細は追ってセンターのウェブサイトなどに掲載しますので、ご確認ください。

学園祭（茗荷祭）

9月26日（土）・27日（日）に東京文京学習センターで開催します。詳細が決まりましたら、センターのウェブサイトなどにお知らせを掲載する予定です。

みなさまのお越しをお待ちしています。